



平成二十六年度の公開学術講演会は、聖徳大学教授の大庭邦彦氏を講師に招き「幕末政局と徳川慶喜―禁裏守衛総督・征夷大将軍期を中心に―」と題して、十月四日(土)に開催された。

この前年となる平成二十五年に歿後百年を迎えた徳川慶喜に関する研究史を顧みれば、國學院大學(本学)と所縁の深い三上参次、萩野由之、井野辺茂雄らが洪沢栄一のもとで編纂に携わった『徳川慶喜公伝』(龍門社 大正六年)をはじめ、後には本学教授であった藤井貞文が『宿命の將軍徳川慶喜』(吉川弘文館 昭和五十八年)を著すなど、徳川慶喜研究は大正時代から昭和の戦後にかけての本学における幕末維新史研究の柱の一つであった。また、慶喜の母は有栖川宮織仁親王王女の吉子女王であり、本学の母体であった皇典講究所の初代総裁有栖川宮織仁親王とは従兄弟関係にあることをはじめ、有栖川宮家の祭祀を継承した高松宮家にあつて、喜久子妃殿下は慶喜の孫に当たることなど、有栖川宮家・高松宮家より御高配を賜ってきた本学との所縁の一つに挙げることができる。このような本学との関わりに加え、平成三十年に明治維新百五十年を迎えることから、これに先駆けて徳川幕府最後の將軍である徳川慶喜を今回の講演会のテーマに設定した次第である。

禁裏守衛総督就任と禁門の変  
大庭氏はまず、慶喜が徳川家の血統を受け継ぐとともに、皇室の血統

**國學院大學**  
**研究開発推進機構**  
**機構ニュース**

Vol.8 No.2  
 発行人 井上 順孝  
 編集人 齊藤 智朗  
 〒150-8440 東京都渋谷区東  
 4丁目10番28号  
 電話 (03) 5466-0104  
 FAX (03) 5466-9237

公開学術講演会  
 「幕末政局と徳川慶喜―禁裏守衛総督・征夷大将軍期を中心に―」  
 大庭 邦彦 (聖徳大学教授)

目次

- ◆ 公開学術講演会「幕末政局と徳川慶喜―禁裏守衛総督・征夷大将軍期を中心に―」(聖徳大学教授・大庭邦彦)..... 1
- ◆ 國學院大學博物館・西南学院大學博物館「研究協力に関する協定」の締結..... 3
- ◆ 第四〇回 日本文化を知る講座「見直される伝統宗教」..... 4
- ◆ 国際研究フォーラム..... 4
- ◆ 「ミュージアムで学ぶ宗教文化―デジタル時代のチャレンジ―」..... 6
- ◆ 國學院大學博物館 特別展「富士山―その景観と信仰・芸術―」..... 8
- ◆ 平成二十六年年度 國學院大學博物館活動報告..... 9
- ◆ 國學院大學博物館 文化庁文化振興費補助金事業..... 9
- ◆ 「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」..... 10
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業..... 10
- ◆ 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告..... 11
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業..... 11
- ◆ 「古事記」の学際的・国際的研究」活動報告..... 12
- ◆ 追悼 吉田恵二先生のご逝去を悼む(内川隆志)..... 13
- ◆ 彙報..... 14
- ◆ 資料紹介 有栖川宮織仁親王 書翰..... 16

も有した人物であったことが、後の行動を考える際に重要であるとした上で、元治元年に慶喜は將軍後見職の任を解かれると同時に、朝廷が新たに設けた役職である禁裏守衛総督・摂海防禦指揮に就任するが、これは慶喜自身が望んでのことであり、かつ事実上將軍後見職の任務も続けたことから、慶喜の朝幕両権力にまたがる新たな権力者としての側面を見出すことができることを指摘した。また、同年に生じた禁門の変での慶喜の行動については、慶喜が先々代当主一橋慶寿夫人である徳信院に送った書簡に、当初は長州藩への説得が第一と慶喜が消極的な姿勢をとったことが示されているが、勅許を得て戦闘に至るまでの手続きを踏むと強硬姿勢へ転換し、自ら陣頭に立って積極果敢な指揮ぶりを見せ

たことを述べ、この時薩摩藩家老の小松帯刀が国元の同志に宛てて送った書簡には、長州寄りの親王や公卿の面々が和睦を説いたのに対し、慶喜が悉く「説破」したことが記されており、戦場で指揮を執ることと混迷した朝議の状況を打開することの両方の課題を、慶喜が見事に乗り越えたことを論じた。さらに禁門の変の後には、一橋慶喜と京都守護職である会津藩主・松平容保、京都所司代である桑名藩主・松平定敬の三者による、いわゆる一会桑政権が京都で朝廷の指示を受けて成立すること

で、幕府とは相対的に自立した朝幕権力が樹立され、兵庫開港・条約勅許問題では、幕府老中の失策を糾弾するとともに、天皇を説得して条約勅許を獲得することに成功し、安政の五ヶ国条約締結以降、懸案であつ

た問題を決着したことを説明した。征長戦争の敗北と征夷大将軍就任

朝廷は禁裏守衛総督の慶喜に長州藩追討の命を下し、幕府は西国の二十一藩に出兵を命じて第一次征長戦争が起きるが、この時長州藩は四国連合艦隊の砲撃にあつて幕府に軍事的に対抗する余裕はなく恭順の藩論を決定したこと、ただこうした事態を幕府回復・権力伸張の好機と錯覚した幕府が、緩和していた参勤交代制を元に戻すなどの反動的政策を押し進めて諸藩の強い反発を招き、征長軍の士気にも大きな影響を与えていくことになったとし、その上で、長州藩内では元治内乱により、高杉晋作を中心に武力倒幕路線が確立され、こうした状況が慶応二年の第二次征長戦争につながるが、この時諸藩からは長州征伐反対の意見が相次いで出たことを指摘した。つまり、当時の戦場には、兵員とその半数程度に当たる人夫が必要であったが、人夫として農民を動員することで負担が増大し、かつ軍需物資の調達などによって起こる物価騰貴と相俟って、第二次征長戦争中、全国各地に大規模な「世直し」一揆や「打ち壊し」が続発したこと、また実際の戦場でも、洋式の軍服姿で新式の前装式ライフル銃を装備した長州軍により幕府軍は決定的な敗北に追い込まれたことから、第二次征長戦争とは、旧態依然とした封建軍制が最早役に立たないことが明らかになった戦争と位置づけられると論じた。

また、こうした最中、十四代将軍家茂が死去し、慶喜が徳川宗家を継承するが、当初は拒否の態度を貫き、七月に宗家相続のみを承諾するも、将軍就

任については依然拒否し続け、十一月になって将軍就任を求める叡慮を受けて受諾したことを説明し、その上でこの宗家相続と将軍就任との間のタイム・ラグは、慶喜にとっては、それまで常にワンセットのものとして意識されていた宗家当主と将軍職が別であることを示すものであったとともに、①家茂の死去を口実に御沙汰をもって休戦している第二次征長戦争の戦局を挽回し、軍事的功績を挙げた後に将軍に就任することで、幕府・将軍が大政を掌握する主体「公儀」であることを諸藩に対し再確認させる、②一會桑政権と対立しがちであった江戸の幕閣との緊張関係を自らの主導のもとに解消し、幕府内における政局主導の優越性をより確固たるものにする、③征長戦争に敗北した場合でも、その軍事的・政治的責任を家茂に負わせ、負債を消し去った後に将軍に就任することで、その政治的失点を最小限に食い止める、④宗家当主と将軍職とは別のものであると天下に示すことを通じて、「公儀」は幕府のみが体現するとした従来の考え方を相対化させ、「公儀」を体現し得る新たな政治体制というオルターナティブを構想させる端緒を開く契機となる、といった政治的意義があつたことを論じ、慶喜は、自分が最後の将軍になる思いで将軍職についたことを指摘した。

#### 「慶応改革」の諸相

将軍に就任した慶喜にとって大政奉還は、奉還の後に自らが主導して新たな体制を確立することに問題があり、そのためには幕府権力の優越性の再構築が不可欠であつたことか

ら、慶喜は「慶応改革」を行つたのだとして、同改革について、①統治機構の改革、②軍制改革、③外交大権の能動的行使の三点から説明がなされた。

まず、①統治機構の改革において、慶喜は親仏派官僚層を積極的に登用して幕府独裁体制の強化を行つており、これは幕府を中核とした雄藩合議体制の構築を構想していた従来の政治姿勢と矛盾しているように見えるが、慶喜としては、幕府独裁体制の構築そのものが目標であつたのではなく、自らの構想を実現するための前提として幕府権力の優越性の再構築が不可欠であつたことから行つたもので、幕府の独裁化はあくまで手段に過ぎなかつたことを指摘した。また、老中部局専任制を採用して、国内事務・会計・外国事務・陸軍・海軍の五局制をしき、各々専任の老中を総裁に任命して機構の合理化とその所在責任の明確化を図るといった革新的な機構改革を実施したとの説明もなされた。

②軍制改革は、第二次征長戦争での軍事的敗北という現実を踏まえて、幕府に反抗する諸藩の動向を抑圧・封殺するため、軍事力を再構築することを目的に、無力な幕府直轄軍である五番方を解体・再編して三兵制度に統一したこと、および慶応三年には、旗本の軍役負担を完全に免除し、代わりに知行高の半高を軍役金として賦課・上納させる幕令を発し、これ以降、旗本が金納した軍役金を財源として、幕府が直接江戸市中の「人宿」(口入屋)を通じて兵卒を確保する方法を取つたことの説

明がなされた。特にこの方法は、武士を士官とし、雇い入れた民衆を兵卒に編制するもので、幕府直轄軍を備兵化することで封建的軍役体制を解体し、近代軍制への転換を目指したものであつたと指摘した。

③外交大権の能動的行使については、慶喜はパリ万国博覧会に実弟である徳川昭武を将軍名代とする使節を派遣し、その目的は欧米諸國に幕府の開明性と能動性を誇示する政治的意図があつたことを指摘した。また、欧米との間に緊張が高まりつつあつた兵庫開港問題では、第二次征長戦争の敗戦処理とあわせて、長州寛典方針とともに兵庫開港勅許を獲得して、慶喜が対外的威信の回復に成功したとの説明がなされた。殊にこの時慶喜は、長州完全復旧・兵庫開港の勅許は、薩摩・長州・土佐・宇和島の四藩と協議し良法樹立の上決定するとの御沙汰案を一蹴し、政権を委任されているのは将軍であり、施行する権限は幕府にあるとの論陣を張り、有力諸侯を黙らせて政治的力量を示したことを論じた。

そして、慶喜は土佐藩からの建白を受け入れて大政奉還を申し出るが、その前日、西周を召命してイギリスの議会制度や西洋の三権分立について尋ねており、慶喜が大政奉還後の政局を自ら主導して切り開いていく考え方をもっていたことと、それゆえ慶喜にとって大政奉還とは、幕藩制の抜本的改革における最初の行動にほかならなかつたことを指摘して、慶喜が先見性をもつた有能な人物であつたと論じた。

## 國學院大學博物館・西南学院大学博物館 「研究協力に関する協定」の締結

協定に至る経緯

“Seinan, Be True to Christ” (西南よ、キリストに忠実なれ)を建学の精神とする福岡県福岡市の西南学院は、米国人宣教師のC・K・ドージャーによって大正五(一九一六)年に創立された。平成十八(二〇〇六)年には、福岡市指定有形文化財の旧本館を改修し、西南学院大学博物館(初代館長・高倉洋彰国際文化学部教授)を開館。キリスト教史関連資料や、学院史に関する常設展のほか、年二回の特別展や企画展・公開講演会などを行っている。



國學院大學博物館との関わりでは、西南学院大学の学内G.P「大学博物館における高度専門学芸員養成事業」の一環として、平成二十五(二〇一三)年度に両館の共同特別展「日本信仰の源流とキリスト教―受容と展開、そして教育―」を実施した。その事業を推進する中において、両館の継続的な連携計画策定に向けた機運が高まったのである。

これを受けて、平成二十六(二〇一四)年七月十五日には、吉田恵二館長(文学部教授)以下、國學院大學博物館の事業に参画する教職員が西南学院大学博物館に赴き、「研究協力に関する協定」を締結し、共同研究事業や研究者・学生の交流を通じた諸事業を計画することとなった。また、十一月二十九日には、西南学院大学博物館の宮崎克則館長(国際文化学部教授)、安高啓明学芸員(博物館助教)・内島美奈子学芸研究員が本学を訪れて協議を重ね、「研究協力に関する協定細目」を決定した。

協定の趣旨

このような連携活動は、単に両館教職員の交流のみを目的としたものではない。國學院大學博物館と西南学院博物館が、大学の研究公開と、学生教育を担う大学博物館のモデルを構築するとともに、それぞれの特徴を活かしつつ、宗教博物館連携の

核になっていくことを目指すものである。具体的には、(ア)共同研究と教育活動の実施、(イ)展示を通じた研究・教育事業の実施、(ウ)講演会やワークショップを通じた生涯学習事業の実施、(エ)刊行物への相互寄稿を計画しており、主に次のような事業展開を想定している。

・共同研究・教育事業

日本宗教史や、対外交流史、美術史等に関する共同研究計画を策定し、その成果をもとに、両館の学生スタッフの学芸教育を兼ねた展示・公開活動を企画していく。

・共同特別展・相互貸借事業

かかる共同研究・教育の成果を公開する大規模な特別展のほかに、両館の収蔵品調査事業の進捗にに応じて、年数回の相互貸借事業も実施する。同事業は、当館の考古資料・神道資料や、西南学院大学博物館のキリスト教資料などを相互に展示することで、トピックス的な小規模展示を実施するものである。併せて、これらの研究成果を広く発信する講演会やワークショップも計画したい。

平成二十六年度の事業

そこで、次のような趣旨のもとに、初の相互貸借特集展示として、國學院大學博物館が所蔵する縄文時代の生業関係資料を、西南学院大学博物館にて展示することとした。会期は、平成二十七年二月十四日(金)から四月二十四日(金)まで。初日には、西南コミュニケーションセンターにて九州縄文研究会が開催されたこともあり、早速多数の来館者が訪れていた。



・相互貸借特集展示

『うみやまの幸―縄文の九州―』今回取り上げる熊本県宇城市市浜ノ洲貝塚(縄文時代後期)と、長崎県南島原市山ノ寺遺跡(縄文時代晩期(弥生時代早期))は、後に國學院大學教授となる熊本出身の乙益重隆氏が、昭和三十年代に調査した遺跡であり、縄文時代の狩猟採集活動や、植物栽培活動の様子を物語る好例として知られてきた。浜ノ洲貝塚では、動物骨や貝殻などの動物遺存体が出土しており、山ノ寺遺跡では、刃痕を残す土器や、それまで見られなかった器である壺・高杯なども発見されている。土器・石器の研究だけでなく、動物考古学や植物考古学の成果を活かしながら、縄文時代の「うみやまの幸」について紹介する。

(文責・深澤太郎)

## 第四〇回 日本文化を知る講座 「見直される伝統宗教」

### 講座の概要

平成二十六年六月七日、十四日、二十一日、二十八日の四回にわたって、本機構主催、渋谷区教育委員会共催によって第四〇回「日本文化を知る講座」が常磐松ホール（※十四日のみ二一〇一教室）にて開催された。旧日本文化研究所主催による第一回の講座が開催されたのが平成二年であり、その後年間一ないし二回の講座を積み重ねて、二十四年を経て四〇回を数えることとなった。

今回の主題を「見直される伝統宗教」とした。これは近年の出版界における仏教ブームや、あるいは平成二十五年の伊勢神宮の式年遷宮が盛大に行われたこと、あるいは東日本大震災後の復興活動に伝統宗教が関

わってきていることなど、様々な局面であらためて伝統宗教が注目されていることを踏まえたものであり、伝統宗教は現在どのような活動を行っているのか、またそれが日本社会においてどのように受け止められているのかといったことについて、四名の講師よりお話を頂いた。以下各回の概要を記す。

### 第一回（六月七日） 「神社の年中行事と地域社会」

講師 鈴木聡子氏（本学助教）

神社の年中行事とは、神社で一年を通して恒例に行われている行事のことをいう。古代より神社の年中行事は古くからあり、神社独自の創始伝承に関わる祭りや、国などが関与する公的の性格の強い祭りや、農耕祭祀（主に稲の生育を祈る祭礼）、

ことがいえる。

また本講座では、このなかでも節日行事としておこなわれた「端午」を一事例として取り上げた。

古代中国では五月を「悪月」と称するほど凶事が多い月と考えられていた。このため、菖蒲・蓬などの芳香の強い植物や薬草などを用いたり、競渡などで速さを競い合ったり、五月五日におこなわれていた。これらの風習が日本に伝来し、国家行事として、更には武家社会・庶民の行事として端午の節日行事が独自の日本文化・風土のなかで形成されていき盛大に行われていった。

近代になると、明治政府によって明治六年に改暦が行われた。その際、これまで行われていた端午をはじめとする節日行事を公的に廃止することとなった。このため国家行事として行われなくなり（江戸幕府がなくなったため武家社会での節日行事も衰退した）、江戸時代まで庶民が行っていた家での節日行事のみが継続して行われていき現代に至っている。

現代社会では地域社会の構造変化などにより地域の都市化・核家族化が進んでいることを示しながら、これらの変化によって、現代における各家庭での端午の行事における現状がどのようなものになっているかを注目した。本学学生を対象に実施したアンケート結果から、現代社会では「端午の節句」の文化が失われつつあることを示した。

更に、地域社会と神社の関わりとして千葉県市川市地区の公立小学校と

地域神社の例を紹介した。歴史的に古くから端午の行事を行ってきた神社の空間で、地域で三〇年ほど前まで各家庭で行っていた「菖蒲葺き」の風習を地域の人々や小学校児童らとともに毎年恒例の行事として復活させた事例を通して、地域社会に根付いていた伝統文化を継承する上で神社の果たす役割は高いことを示した。

### 第二回（六月十四日） 「仏教教団の新たな取り組みと『仏教ブーム』」

講師 徳野崇行氏（駒澤大学非常勤講師）

本講座は「仏教教団の新たな取り組みと仏教ブーム」と題し、供養・祈禱・修行という三つの宗教的役割をめぐって伝統宗教たる仏教教団が現代において見直される動向についてみていくものである。

一点目の供養という役割をめぐっては、まず仏教寺院が葬儀や供養のみを行い、仏教教理の布教を行わないあり方を「葬式仏教」と呼んで批判する動向について取り上げる。こうした供養を消極的に意味づける姿勢がみられるなか、二〇一一年三月十一日に東日本大震災が発生し、約二十万人もの犠牲者をうむ営みが新聞やテレビなどで報道された。火葬、埋葬、葬儀を満足に執り行えないことへの「慚愧の念」が遺族の思いとして紹介され、犠牲者を供養する直向きの僧侶たちの読経や葬儀といった従来「葬式仏教」と揶揄されるような営みが、「人びとの求める宗教者のあり方」として報道された。一方、東日本大震災は供養という

主催：國學院大學研究開発推進機構 共催：渋谷区教育委員会

平成26年度 第40回 日本文化を知る講座

# 見直される伝統宗教

第1回 6月7日(土)  
神社の年中行事と地域社会  
講師 鈴木聡子(國學院大學研究開発推進機構助教)

第2回 6月14日(土)  
仏教教団の新たな取り組みと「仏教ブーム」  
講師 徳野崇行(駒澤大学非常勤講師)

第3回 6月21日(土)  
心のケアと伝統宗教の力  
講師 高橋 厚(東北大学大学院宗教学部准教授)

第4回 6月28日(土)  
国際交流と神道  
講師 岩橋克二(神社本庁国際交流課長)

日時：6月7日・14日・21日・28日の各土曜日 13時30分～15時00分  
場所：國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホール(学術メディアセンター1階)  
※6月14日のみ2101教室  
(アクセス：JR渋谷駅南口より、徒歩/バス54番のりば「学301赤坂センター前」行にて、「國學院大学前」下車)

**入場無料 事前申込制(定員：各回300名)**

お申し込み方法 5月31日(必着)までに、電話、はがき、FAXまたは電子メールで、  
(1) 郵便番号、(2) 住所、(3) 氏名(フリガナ)、(4) 電話番号、(5) 「日本文化を知る講座」  
参加希望の旨を明記し、下記までお申し込みください。

お申し込み・お問合せ先 國學院大學研究開発推進機構事務局  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 TEL: 03-5488-0104 FAX: 03-5488-9237  
E-mail: kikou@kokugakuin.ac.jp ホームページ http://www.kokugakuin.ac.jp/foed

役割だけでなく、二点目にあげた祈祷という役割についても見直される契機をつくった。震災犠牲者のために営まれる慰霊祭は、被災地復興を願う祈祷と併修される場合が多く、例えば二〇一一年九月二十六日の朝日新聞で、「高田松原」の松を護摩木とした成田山新勝寺での祈祷法要が報道されている。このように東日本大震災を契機として「葬儀や供養は必要」という東北の声が全国的に伝えられたことは、仏教教団が担っている供養や祈祷といった営みが見直される動向といえる。

三点目の修行をめぐるのは、「仏教ブーム」の動向、とくに「ぶち修行」を取り上げる。近年、お釈迦様や僧侶を題材とした漫画が出版される一方、仏像のフィギュアが販売されるなど、「仏教の消費」と呼ぶべき動向がみられる。このようなブームの一翼を担っているのが「ぶち修行」を勧める書籍の存在である。これらの書籍では坐禅・写経・滝行が紹介されており、修行が「癒やし」を持ち、「気づき」や「本当の自分」との出会いをもたらすものとして語られている。「癒やし」や「自分探し」といった「修行」の意味づけを通して、現代の人びとが本来「修行道場」である仏教寺院にあらためて、「修行」という宗教的役割を求めており、見直される動向が看取できるのである。

### 第三回(六月二十一日)

「心のケアと伝統宗教の力」

講師 高橋原氏(東北大学大学院文学研究科准教授)

二〇一二年度から東北大学大学院

文学研究科実践宗教学寄附講座は、諸宗教の宗教者を対象として、公共空間で布教とは異なる形で人々の心のケアを行なう「臨床宗教師」の養成を開始した。

この背景には、日本が直面している超高齢多死社会の到来がある。多くの日本人が伝統的な死生観や宗教文化から切り離されて病院や施設で孤独な晩年を過ごし、亡くなっている。もう一つの背景として東日本大震災がある。この未曾有の出来事が、いわば宗教者の本能に火をつけたと考えられる。苦難に直面する人々を支え、彼らが真摯に自分の人生と向き合う手助けをするのが宗教者の役割ではないだろうか。

しかし、政教分離という観念が浸透し、葬式仏教が批判の対象となっている現在、仏教僧侶を初めとする宗教者達は、宗教者であることにある種の負い目を感じ、公共的な場所に出ていくためのノウハウを失っている。そこで、キリスト教のチャプレンを一つのモデルとして、グリーンケアやスピリチュアルケアといった新しい観点から宗教者の役割を見つめ直そうというのが、臨床宗教師養成の試みである。

東北大学の研修では、傾聴とスピリチュアルケアの能力向上を第一の目的としているが、諸宗教の協力と対話を重視するとともに、心理カウンセラーなど他の専門職にはできない宗教者ならではの特質を活かしたケアの方法を学ぶことに特色を持たせている。

日本全国から集まった幅広い宗教

宗派と年齢層の受講者が研修を修了した。彼らは、今、自らのホームグラウンドに戻って、日頃の宗教活動の中にどのような成果を活かしていくのか模索を始めている。また、活動の場所を医療や福祉の現場に求めて動き出した人々もいる。

これが新しい変革の動きであることは確かであるが、それは同時に、後世に残し、伝えていくべき宗教文化とは何かを問い直すことでもある。各宗教を取り巻く状況や宗教者の役割の自覚はさまざまであるが、地域の中の神社やお寺がまだまだ多くの人々の心のよりどころとなっている現在において、五〇年、一〇〇年後の宗教のあり方が問われていると考えられる。

### 第四回(六月二十八日)

「国際交流と神道」

講師 岩橋克二氏(神社本庁国際交流課長)

近年、欧米で神道が一定の関心を集めている。理由はいくつか考えられるが、主なものとして神道が日本文化や日本人を知るうえで不可欠であること、自然と人間との関係に新しい視点を提供していること等が挙げられる。

そこでいざ神道について調べようとして気付くのが、日本人の宗教的多様性である。例えば神道系と仏教系の信者数を合わせると、日本人の人口より多くなる。これは欧米では考えられない。また、日本人は「宗教は信じていない」と言いながら、日本人のほぼ九割が初詣をし、受験シーズンは合格祈願に多くの人が神

社を訪れる。さらには、子供が生まれればお宮参り、結婚式はキリスト教の教会で、葬儀は仏式と、一人の人間が状況によって宗教を変えているように見える。主に一宗教を信仰する人々にとって、これらはほぼ理解不能な状態と言つてよい。国際交流とはこの理解不能部分を相手に伝えることが大切だと考えている。

では実際に交流する際、大切にしなければならぬことは何か。他国・異文化との交流で不可欠なのが外国語だが、言語は補助的なものでしかなく、翻訳では伝わらないことが多い。特に日常的に使っている言葉ほど意味を深く考えたことがないため、外国人に伝えることが難しくなる。「こんにちは」の意味を訊ねられた際、どれだけの人がきちんと答えられるだろうか。神社関係においても、日本人が聞いてもよくわからない言葉が当たり前のように使われており、それを外国人に伝えるには、実はきちんとした意味の把握が必要になる。

自分のことを伝えると同時に相手のことを理解することも必要になる。日本の文化と相手の文化に近いところがあれば、それを例に挙げて説明することでより身近なものとして感じてもらうことができるからだ。国際交流とはそもそも人間同士の交流なのだから、一方的な態度ではその場での知識の伝達にしかならない。押しつけではなく、互いを知るといふ意味での国際交流が今後より大切になっていくだろう。

(文責・星野靖二※各回概要は講師による)

## 国際研究フォーラム

## 「ミュージアムで学ぶ宗教文化

## ―デジタル時代のチャレンジ―

日本文化研究所では、研究所プロジェクト内容と密接に関連したテーマでの国際研究フォーラムを毎年開催してきた。本年度は平成二十六年(二〇一四)年九月二十七日(土)に、「ミュージアムで学ぶ宗教文化―デジタル時代のチャレンジ―」をテーマとして、本学常磐松ホールにて開催した。科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに、宗教文化教育推進センター(CERC)との共催である。

テーマとして焦点化したのは、宗教文化を教育し、学習する場としてのミュージアム(博物館・美術館等)である。日本には、五千もの広義の博物館があり、多くが歴史に関わるものである。そのなかには宗教文化に関わる展示も少なくない。こうしたミュージアムを、宗教文化を学ぶ場としてどのように活用できるのか。今回のフォーラムは、実際にミュージアムを日本文化・宗教を学ぶ授業において活用したり、展示作品を授業で取り上げている事例などの具体的報告を通して、情報交換を行い、問題点を共有することで、今後の活用方法の展開を議論することを目指した。

また特に、デジタル時代という状況を鑑み、情報技術の活用や情報発

信の工夫の仕方などについても、そのような具体例について知ることを通じて、今後の可能性を議論することもねらっている。

なお、本年度は、國學院大學博物館が中心となった、平成二十六年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」が採択・実施されているため、それとの連携も念頭に置いたテーマとなっている。

フォーラムは、四つのセッションから構成され、十三時から五時間近くにわたって行われ、約一二〇人が参加した。四人の発題者からのそれぞれの発題と、コメントからのコメントがなされた後に、フロアを交えての質疑応答がなされた。各発題者と発題内容、コメントは次の通りである。

## ・第一セッション

高橋徹氏(株式会社 ATIR

Creative)

「地域文化の発見的伝承―スマートフォン時代の文化資料デジタルアーカイブの活用―」

## ・第二セッション

上西巨氏(國學院大學)

「神道・神社博物館の課題と展望

―インターネットを中心とした博物館情報・メディア構築について―」

## ・第三セッション

Alan Cummings 氏 (University of London, UK)

「日本文化史の授業とミュージアム―大英博物館の場合―」

## ・第四セッション

Samuel C. Morse 氏 (Amherst College, USA)

「Religious Art, the Museum, and the Digital Age」

## ・コメント

牧野元紀氏(公益財団法人東洋文庫)

司会は、全体を通して井上順孝(國學院大學)が担当した。

まず冒頭で、井上が企画の趣旨を説明した。前述のように、博物館に所蔵された学術資産をデジタル時代においてどのように発信・活用できるかについて、本フォーラムを通じてアイデアを出し合いたいとした。

各セッションの発題とコメントの概要は以下の通りである。

## ・第一セッションの発題者である高橋氏は、情報工学を専門とし、実際に産学連携によってミュージアムにおけるデジタル技術の開発・活用をプロデュースしてきた。同氏は、佛像などの宗教文化はユーザーインターフェースデザインの極めて優れた先例と捉えられるとし、そうした宗教文化とITとをどうつなげられるかを構想してきた。これまでの取り組みの例として、ミュージアムの所蔵

資料の画像をタッチして検索できる「イメージファインダ」や「時空間資料画像表示システム」が紹介された。どちらも画像から直感的に資料にアクセスでき、検索のみではなく、実際の所蔵資料に誘導したり、学術研究の要請にも応えるものである。

次に、スマートフォンアプリ「ちずぶらり」などの例が紹介された。さまざまなイラストを地図上に現在地表示できるアプリであり、古地図などと連動させて、史跡や社寺などを歩きながら歴史を体感できる。観光マップや街歩きイベントなどと連携することで、参加者の書き込みにより情報が蓄積される仕組みも持つ。このような情報システムやアプリの具体例が説明され、そのデザインの背景と活用可能性について論じられた。

第二セッションの発題者である上西氏は、國學院大學博物館の前身の伝統文化リサーチセンター資料館で嘱託学芸員を務め、関連事業の『神社博物館事典』(雄山閣、二〇一三年)の編纂に関わってきた。同氏は「神社博物館」を、「神社に付属している展示施設」と規定した。これらは本来各神社の神宝等の保存目的だったものであったが、徐々に社会に公開・発信することが目指されてきたという。

二〇〇九年からのプロジェクトでは、全国の神社付属展示施設の悉皆調査を行い、それに基づいて前掲事典が刊行された。その過程で、同事典の資料編のウェブ版も作成され、現在もアーカイブとして残されている。付加すべき情報の余地は数多いが、これが神社博物館のデジタルデー

データベースのプロトタイプとして機能しており、ミュージアム連携構想につながる基礎データだと言えらる。

神社博物館は、比較的大きなところでウェブコンテンツ等も充実させて独自にどんどん発信している一方で、神職が社務と兼任であり力を注ぐ余裕がないところでは細々と維持されているといった二極化が観察される。そのなかで、今後、國學院大學博物館が果たす役割の可能性は大きいのではないかと。本学が、神社付属の博物館施設のみならず、仏教・キリスト教関連展示施設など、総合的に宗教文化を学ぶことのできるポータルサイトとなるようなコンテンツのブランドデザインを協同で構築できれば、研究成果の教育への還元、社会への還元という点においても理想的と思われる、と述べた。

第三セッションの発題者であるカミングス氏は、ロンドン大学で日本文化史コースを教え、また大英博物館を授業で活用している。初年次教育においてミュージアムを理解する方法について紹介がなされた。大英博物館の日本ギャラリーは、三万点ほどのコレクションに基づき、三部屋を用いて、よく企画された繊細で知的な構成で展示がなされている。

同氏は、毎年二回ほど学生を連れて行くというが、各回の目的は異なる。一度目は、目で見てわかる性質のもの、すなわち、どのようなものが展示してあり、その展示物は学生がコースで学習したこととどう関連しているかをつかむためであり、学生は関心をかきたてられたり、驚嘆

を覚えたりする。ところが二度目は、展示品のポリティクス、特に展示品に関して博物館が構築する「物語」を、学生に考察させるためである。展示物の選び方や周辺の文字データを通じて、異文化である日本のどのようなイメージを構築しようとしているのか、その手法はどのようなものか、そのイメージは学生の既存のイメージとどう関連しているのか、といったことを考えさせるようにしているのである。

そしてコースの最終授業では、現代日本に対する理解に立ち戻り、太平洋戦争におけるニューギニア戦線や、それに関する靖国神社の遊就館での展示に主に焦点を当てる。ここでは遊就館で見られるキュレーションや展示の戦略を通じて、記憶が構築され、語られる手法について、大英博物館の物語と比較しながら検討するよう学生に促している。いずれにしても、博物館の教育への活用には、こうした展示方法・視点・戦略等をめぐる教員の側の計画的な努力が必要だ、と述べた。

第四セッションの発題であるモース氏は、日本の宗教美術史を研究し、アマースト大学で博物館学のクラスを担当している。仏教美術などの宗教的オブジェは、元々はそれらが用いられる文脈によって意味を付与されているが、ミュージアムではこれらの文脈は沈黙させられてしまう。同氏は、仏教美術作品によっていかに人々が情動的・情緒的に動かされるかを示すべく、宗教的展示品をそれが実際に使われていた場面とともに

展示することを目指した企画展「Object as Insight: Japanese Buddhist Art and Ritual Practice」を、一九九二年にニューヨーク・カトナ美術館とボストン美術館で行った。

そこでは、本堂・荘厳具などのインスタレーションとともに、内部で法要を行うなど、日本における宗教的空間や信仰儀礼の独特の性質を理解してもらえよう努めた。研究の世界がデジタル技術を受容した現在、こうした試みの可能性はさらに広がっているはずである。同氏が現在関わっているプロジェクトにおける「デジタル人文学」の趣旨は、「芸術家や学者が新しい技術を学術研究、教育、創造的な仕事に取り入れるのを助けること」などであり、それによる学術分野の横断と人々の結びつきの変容を目指している。ただしそれでも、デジタル技術で達成されるものと、博物館の展示とは全く異なるものであり、コンテキストを重視しつつ、「博物館と共」に仕事するべき」と述べた。

四つの発題を受けて、東洋文庫ミュージアムにおいて中心的に展示に関わっている牧野氏より、同ミュージアムの紹介ならびにコメントがなされた。各コメントの詳細と応答については省略するが、全体としては、歴史資料を扱う際の差別問題や歴史問題等への配慮の問題、情報弱者・強者のギャップの問題、貴重美術品所蔵を公言することへの躊躇、欧米博物館におけるアート化の傾向、博物館において西洋美術が優位であるなかで東洋・日本に目を向けてもらうための工夫、などについて

それぞれ鋭く指摘された。

総合討議では、フロアから多くの貴重な意見や質問が出された。詳細な応答は省くが、デジタル技術者の育成体制の問題、複写・複製と実物との関係の問題、オープンデータの活用可能性、アプリ開発やデジタル技術導入の予算的問題、などが提起され、議論が深められた。

最後に司会の井上から、さまざまな領域の専門家によるネットワークワーク形成が提唱された。

\* \* \*

なお、本フォーラムの様子は、十分に編集され、CSのスカイパーフェクTV!529チャンネルにおいて、平成二十六年十一月四日(火)二十一時～二十二時、同十一日(火)二十一時～二十二時に放映された。

(文責・井上順孝)



### 國學院大學博物館 特別展 「富士山―その景観と信仰・芸術―」

#### 展示の趣旨

日本を代表する霊峰「富士山」は、平成二十五(二〇一三)年六月に、「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の名で世界文化遺産に認定された。これを記念して、國學院大學博物館の連携機関である山種美術館では、平成二十六(二〇一四)年三月から五月にかけて特別展「富士と桜と春の花」を開催し、富士山をテーマにした絵画作品の展示を行っている。

そこで当館では、同じく世界遺産登録にあわせて、主に信仰の歴史と、芸術的観点から見た富士山の姿について展観することとした。会期は、平成二十六(二〇一四)年九月一日〜十月十一日である。

#### 展示の概要

##### ・第I章「富士山の噴火と

##### 火山祭祀の源流」

八世紀末から火山活動を活発化させた富士山でも、「浅間大神」が官社として国家祭祀の対象となり、災害の排除と豊穡が祈られた。ここでは、プロト神道が形成されつつあった古墳時代から、神祇祭祀の定型化を迎えた古代にかけての火山信仰について、具体的な考古資料に基づいて概観する。

##### ・第II章「富士の神から浅間菩薩へ」

本格的な登拝行が行われるようになったのは、火山活動が小康状態を迎えた十二世紀以降のことである。

た末代人が、山頂に多数の仏典を埋納するなど、「浅間大神」を仰ぐ山から、「浅間大菩薩」のもとへ登拝する修験の山にもなった富士山では、徐々に山麓の社寺が整備されていった。

##### ・第III章「信仰の大衆化と

##### 富士講の展開」

中世の終わりには、多くの民衆が富士山を登拝するようになる。明治初年の神仏分離は、各地の山岳霊場に影響を及ぼし、表口の村山修験も退転を余儀なくされたが、富士講の諸派は教派神道などの形をとって存続し、今日に至っている。ここでは、渋谷にも存在した富士講の姿を通して、今も生きる富士山信仰の様子を見ていく。

##### ・第IV章「富士山をめぐる文学と芸術」

遙か万葉の時代から文学作品の対象になってきた富士山。特に信仰との関わりにおいて見てみれば、『竹取物語』の「かぐや姫」も、『神道集』に登場する富士山の仙女「赫野姫」と相通していることがわかる。また、近世には、鏡・陶磁器などの工芸品や、多色刷りの錦絵などに、様々な富士の姿が描かれた。

##### ・終章「不二之山」

人々は、富士の神仏に抱かれていくことを知ってか知らずか、それでも山頂を目指していく。山伏でもある写真家、井賀孝は、自ら山をはし

り、山を撮ってきた。終章では、本展覧会のための撮り下ろしを含む井賀作品から、唯一無二の「不二之山」を体感する。

#### 関連事業

その他、本展覧会の関連事業としては、トークイベント・講演会・ミニコンサート・ワークショップを開催した。

このうち、トークイベント「『不二之山』―山伏の世界に身を投じた写真家、井賀孝が捉えた富士山―」(九月六日)では、今般の展覧会に作品を提供した山伏でもある写真家の井賀孝氏を迎え、修験道や富士山の魅力を紹介するとともに、プロカメラマンの目を通して見た信仰の山の世界について語り合った。

講演会「富士山信仰と歴史・文学」(九月十五日)では、笹生衛氏が考古学から見た富士山信仰の起源と展開について発表し、三橋健氏が文学作品の研究からかぐや姫の「罪」とは何かを読み解く試みを披露した。講演会の後には、院友会館にて西村元希氏によるミニコンサート「富士の山と信仰をピアノに聴く」も開催され好評を博した。

また、ワークショップ「富士講の世界―渋谷の富士塚を歩く―」(九月二十日)では、城崎陽子氏が富士講の概要について解説した後、参加者とともに渋谷区千駄ヶ谷の鳩森八幡神社に所在する富士塚

を、実際に歩いてみるイベントを実施した。笹生・三橋・城崎各氏の発表内容については、展覧会図録(全一七〇頁・並製)の巻頭論文に収録してある。

なお、本展覧会は、平成二十六(二〇一四)年度の文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の補助を受け、当館が中核館となつて実施する「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」によるものである。事業全体の概要は、一〇頁を参照されたい。

(文責・深澤太郎)





## 平成二十六年 國學院大學博物館活動報告

### 活動概要

平成二十六年度は、文化庁文化振興費補助金「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」(以下、ミュージアム連携事業)が採択されたこともあり、従来計画されていた企画展、特別列品、ミュージアムトーク、ワークショップ、英語ガイドの育成の事業や、ミュージアム連携事業で企画された事業も実施した。また、七月には大学博物館における学際研究をめざし、西南学院大学博物館(福岡県)との研究協定を取り交わした。

特別展二回、企画展を五回、特別列品を三回実施した。教育普及事業では、ミュージアムトーク、ワークショップを実施した。特にワークショップは白根記念渋谷区郷土博物館・文学館や山種美術館をはじめ近隣の連携ミュージアムと金王八幡宮や鳩森八幡神社などの地域の神社との連携を図り、子供から成人まで幅広い世代が学ぶことができる当館独自のプログラムを開発した。いずれのイベントも好評であった。さらに、展示内容の多言語化を進め、外国人来館者の対応として、英語版・中国語版パンフレット等の作成、本学学生による英語ガイド養成も行った。英語ガイドでは十一月から外国人の来館者にイングリッシュガイドツアーを実施した。また、館内で博物館に

関連した研究会を開催するなど、博物館における活動の幅は大きく広がりを見せた。  
(文責・加藤里美)

### ワークショップ・トークイベント等

日程	内容	概要
6.28	蔵の文化体験※	会場：國學院大學博物館、金王八幡宮 参加人数：24名
8.4	貝塚で知ろう貝の生態※	会場：國學院大學博物館 参加人数：11名
7.26-27	紙すき※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 参加人数：合計30名
7.30	夏休みこども企画「探検！ミュージアム」※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館 参加人数：7名
8.3	水の景・水の音—日本美術と文化—※	会場：國學院大學120周年記念2号館1階2101教室 講師：山崎妙子(山種美術館館長)、藤澤紫(本学特任教授)、根岸茂夫(本学教授) 参加人数：合計151名
8.9・10	夏の体験学習講座「勾玉づくり」※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 講師：粕谷崇(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)、内川隆志(本学准教授) 参加人数：合計34名
9.6	「不二之山」—山伏の世界に身を投じた写真家、井賀孝が捉えた富士山—※	会場：國學院大學博物館 講師：井賀孝(写真家)×深澤太郎(本学助教) 参加人数：40名
9.20	富士講の世界—渋谷の富士塚を歩く—※	会場：國學院大學博物館、鳩森八幡神社 講師：城崎陽子(本学兼任講師) 参加人数：32名
10.5	輝ける色彩—日本美術の中の金と銀—※	会場：國學院大學学術メディアセンター1階常磐松ホール 講師：山崎妙子(山種美術館館長)、藤澤紫(本学特任教授)、宮廻正明(東京藝術大学大学院教授) 参加人数：合計130名
10.5	雅楽の調べ—六調子と神楽舞—※	会場：國學院大學学術メディアセンター1階常磐松ホール 演奏者：青葉雅楽会(本学学生団体)、山口耕司(本学職員) 参加人数：合計120名
10.31	第1回 ミュージアム展示とデジタル技術※	会場：國學院大學博物館 講師：中牧弘允(吹田市立博物館館長・国立民族学博物館名誉教授)、中尾徳仁(天理参考館学芸員) 参加人数：32名
11.29	東山魁夷と日本の四季—日本の自然表現—※	会場：國學院大學百周年記念館4階記念講堂 講師：山崎妙子(山種美術館館長)、河野元昭(京都美術工芸大学学長) 参加人数：合計297名
12.19	第2回 ミュージアム展示とデジタル技術※	会場：東洋文庫 講師：高橋英一(凸版印刷)、安井昌彦(凸版印刷) 参加人数：24名
3.7	猿楽町の遺跡を歩く※	会場：猿楽町 講師：粕谷崇(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員) 参加者：20名(予定)

### 常設展ミュージアムトーク

日程	内容	解説者
5.17	縄文土器の文様を読む	石井匠
6.7	神と紙のはなし	吉永博彰
6.21	経筒と瓦経	阿部常樹
7.5	茅の輪のはなし	齋藤しおり
7.19	玉作とまつり	加藤里美
10.4	伊勢の神宮 神衣祭にお供えする布のはなし	老田理恵子
10.18	貝の魅力—熊本県浜ノ洲貝塚を中心に	浪形早季子
10.18	神社のお供え物	老田理恵子
10.18	國學院大學所蔵の有栖川宮家資料	加藤里美
11.1	常設展示ハイライトツアー	高野裕基
11.15	板碑のはなし	阿部常樹
12.6	万祝とその図柄	小山田江津子
12.20	土偶のはなし	石井匠

### 平成26年入館者数

月	26年(名)
1月	1,263
2月	891
3月	705
4月	2,327
5月	2,240
6月	2,595
7月	3,799
8月	2,416
9月	2,102
10月	4,102
11月	4,040
12月	1,468
合計	27,948

### 展示内容と関連事業

	内容	会期	関連事業
特別展	富士山—その景観と信仰・芸術—※	9.1~10.11	トークイベント 9.6 15:00~16:00 「「不二之山」—山伏の世界に身を投じた写真家、井賀孝が捉えた富士山—」講師：井賀孝(写真家)×MC：深澤太郎(本学助教) 講演会 9.15 13:00~15:30 「富士山信仰と歴史・文学」講師：笹生衛(本学教授)、三橋健(本学元教授)
	渋谷の縄文・弥生時代—最新の調査成果から—※	2.7~3.31	ピアノコンサート 9.15 16:00~17:30 「富士の山と信仰をピアノに聴く」演奏者：西村元希(ピアニスト) ミュージアムトーク 2.21 15:00~16:00 粕谷崇(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)
企画展	起請文と牛玉宝印	3.15~5.18	ミュージアムトーク 4.12 15:00~16:00、5.10 15:00~16:00 千々和到(本学教授)
	新収蔵品展	6.2~6.28	—
	明治国学の展開と継承・発展—井上頼国歿後百年記念展—	7.5~8.24	ミュージアムトーク 7.5 15:00~15:30 齊藤智朗(本学准教授)、高野裕基(本学学芸員)
	戦国織豊期の古文書—國學院大學学びへの誘い—	10.18~11.8	ミュージアムトーク 10.18 12:00~12:30、13:30~14:00 堀越祐一(本学兼任講師)
特別列品	ジパングへの途—西洋古地図に描かれた極東像—	11.15~1.16	ミュージアムトーク 11.22 14:00~15:00 吉田敏弘(本学教授) 12.13 14:00~15:00 関良子(本学大学院博士課程前期修了)
	多言語化される古事記	5.21~5.28	ミュージアムトーク 5.24 14:00~14:30 平藤喜久子(本学准教授)
	祇園祭	7.1~7.31	—
	浮世絵に描かれる水—広重と国芳の名品を中心に—※	7.20~8.5	ミュージアムトーク 8.2 11:00~11:30、13:30~14:00、15:00~15:30 横山實(本学名誉教授、国際浮世絵学会理事、ポーラ伝統文化振興財団評議員、日本社会病理学会会長)

※印はミュージアム連携事業実施項目

國學院大學博物館  
文化庁文化振興費補助金事業  
「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」

活動概要

当該事業は、文化庁文化振興費補助金、地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業に國學院大學博物館が申請したもので、「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」(以下、ミュージアム連携事業)として採択された。平成二十六年四月三十日(水)には全体会議を開催し、赤井益久学長から事業内容について、國學院大學博物館が担う役割と今後について述べられ、事業の主旨と運営について全体で承認された。連携先である渋谷区(主に白根記念渋谷区郷土博物館・文学館)、東洋文庫、山種美術館と協力し、①国際都市「渋谷」におけるグローバルな集客活動の推進、②日本の有形・無形文化の効果的発信、③日本文化・宗教文化に対



第1回全体会議



ミュージアムガイドをする学生



二十二社調査(伏見稲荷大社)



第2回ミュージアム展示とデジタル技術研究会



ワークショップ「浮世絵摺り体験」

する理解のある地域的・国際的人材育成の事業モデルを構築する、の三つの大きな柱を指標として、地域社会に根付いたシステムを構築し、歴史・宗教教育を通じた人材育成、日本文化の国内外発信にむけて、以下の通りの活動を展開した。

ミュージアム情報の多言語化  
多言語による日本文化の普及と集客力向上に向けたミュージアム連携事業では、映画館共通の紹介映像を作成、上映を開始し、さらにポータルサイトの開設と運営によって以前よりも多くの方に博物館の存在が認識されつつある。また、各館のパンフレットの多言語化やミュージアムガイドによるガイドツアーの開催により、外国人来館者の日本文化への理解を促進することとなった。加えて外国人来館者へのニーズ調査の結

果とあわせて、多言語での博物館情報発信の重要性が改めて明らかとなり、博物館が発信する情報の多言語化に対する必要性は高まったといえよう。

ミュージアム事業による人材育成  
日本文化と宗教文化への理解を深めた人材を育成するミュージアム連携事業では、ミュージアムの資料とデジタル化した画像資料の作成と公開に基づく教育プログラムとして二十二社の調査・研究を実施した。また、東洋文庫との共催でミュージアム展示とデジタル技術に関する研究会を二回開催し、博物館におけるデジタル技術の活用について検討した。

体感・実感するミュージアム  
日本文化を体験・実感するミュージアム連携事業では、当館と連携館の持つ有形資産(学術資料・美術作品)だけでなく、無形資産(芸術・音楽・技能)の上映・公演・体験とコラボレーションを通して、日本文化への理解を効果的に深めていくことを目的として、連携館同志また

本学のもつ多くの条件を活用した多機能型イベントを開催した。例えば、富士山をキーワードとして、特別展「富士山―その景観と信仰・芸術―」の開催に伴い、トークショーや講演会、富士山を題材とした楽曲を奏でるピアノコンサートの開催、山種美術館の「水の景・水の音―日本美術と文化―」展に関連した講演会、当館では特別列品「浮世絵に描かれている水―広重と国芳の名品を中心に―」を開催し、ミュージアムトークや浮世絵の摺り体験ワークショップを展開して、日本文化理解のためのイベントを多く提供した。

博物館の今後に向けて  
大学附置の博物館は、大学が有する学術資料を公開し研究成果を発信する場である。これまでは、学内教育利用や研究者を中心としてきたこともあり、一般の来館者を対象としたものが不十分であった。しかし、一般に公開し博物館を冠している限り、生涯学習の場であり教育施設の場でもある。より多くの来館者に、國學院大學の学術資産に対して深い理解と学びの場を提供し、活用してもらうための努力をさまざまな形で今後も継続していかなくてはならないのである。当該補助金事業が契機となつて、こうした活動が継続されていくことを期待したい。

(文責・加藤里美)

## 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として、本学所在地である「渋谷」、そして「地域」「日本」及び「グローバル化する世界」における「共存社会の構築」を提言する学部横断型の学際研究事業である。「渋谷学」「共存学」両プロジェクトを統合して推進される本事業は、「建学の精神」を具現化するために、これまで蓄積された研究成果を集約し、本学の特色を活かした研究を進めると同時に、これらの成果によって地域貢献・社会還元する在り方を追求する。

### 「渋谷学」グループ

「講中のにぎわい—もう一つの都市コミュニティ」と題して、平成二十六年第一回公開研究会を十二月十三日に開催した。研究報告者は、松井圭太氏(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)「富士講の組織と活動—渋谷区を中心に—」、鈴木志乃氏(足立区郷土博物館専門員)「足立区における講中組織の機能」、高橋奈津子氏(本学大学院博士課程後期)「雑司ヶ谷御会式講中の構成」、コメンテーターは、渡邊欣雄氏(文学部教授)、八木橋伸浩氏(玉川大学教授)、コディネーターは飯倉義之氏(文学部助教)が務めた。全体討議では、各報告に関連して、都市コミュニティにおける講組

織の諸形態について、居住地域を同じくする自然発生的集団としてのコミュニティと、共通の目的で結束する自発的集団を意味するアソシエーションの概念を考慮しながら、多様な論点が提示され、活発な議論が展開された。

また、平成二十七年三月十四日には、「春の小川を遡る—渋谷川の支流(宇田川水系)の流路を歩く—」と題して、林和生氏(文学部教授)を講師とする本年度の第二回公開研究会を開催する予定である。

成果刊行物としては、渋谷地下商店街(しぶちか)の創設に大きな役割を果たした並木貞人氏へのインタビューを中心に、渋谷聞きがたり2『しぶちか』を語る—戦後・渋谷の復興と渋谷地下商店街—(十一月十五日刊行)を編集発行した。また、戦後から現在に至る渋谷をテーマとする『渋谷学叢書4 渋谷らしさの構築』が、経済学部教員を中心として執筆され、平成二十七年二月末に雄山閣から刊行される予定である。その他、研究開発推進センターに事務局を置く都市民俗学研究会が編集する『都市民俗研究』第二〇号を同じく二月末に発行する。

また、現在進められている渋谷の再開発を一つの焦点として、渋谷の歴史と現状の記録化を目的とする商店街関係者の聞き取り調査を実施し

た。その他、「渋谷学」の研究成果を学生に還元するオムニバス形式の総合講座「渋谷学」(平成二十六年後期授業)を開催した。

### 「共存学」グループ

「震災復興と巨大防潮堤/風土・歴史文化をふまえた地域づくりの展望」と題して、景観生態学・地理学の観点から震災復興を考えることをテーマとする平成二十六年第一回公開研究会を八月九日に開催した。講師は廣瀬俊介氏(風土形成事務所主宰)、コメンテーターは茂木栄氏(神道文化学部教授)、司会は古沢広祐氏(経済学部教授)が務め、風土・歴史文化をふまえた地域づくりの重要性について、震災復興の現状も含めて、会場参加者も交えた活発な議論が展開された。

また、平成二十七年三月九日には、「平和共存から共同体まで—国際政治学における共存の意味論—」と題して、本年度の第二回公開研究会を開催する予定である。講師は遠藤誠治氏(成蹊大学教授)、コメンテーターは磯村早苗氏(法学部教授)、菊田真司氏(法学部教授)、司会は古沢広祐氏が務める。

成果刊行物としては、環境・開発、社会・文化・歴史、経済・政治などの諸課題について、「共存社会の構築」を追究する論考をまとめた、『共存学3・復興・地域の創生、リスク世界のゆくえ』が、平成二十七年二月末に弘文堂から刊行される。同書の執筆内容については、学内研究会を計四回開催して検討した。

本年度の出張調査としては、平成二十三年以降、継続的におこなってきた東日本大震災被災地の調査を、八月に二人、十一月に五人が出張して実施した。被災地における地域コミュニティの復興と伝統文化、特に神社、伝統芸能の果たす役割などを焦点として、岩手県大槌町を中心とする被災地の現状を確認した。

また、「多様性と調和」をテーマとして八月二十二日から二十四日にかけてインドネシア・バリ島で開催された、「第二回アジア未来会議」(関口グローバル研究会主催)には、「共存学」プロジェクトから三人の関係者が参加し、研究報告をおこなった(古沢広祐経済学部教授、ノルマン・ヘイヴンズ神道文化学部教授、菅浩二神道文化学部准教授)。

そのほか、平成二十七年三月十四日から十八日にかけて仙台市で開催される第三回国連世界防災会議には、今後の震災復興における学術的貢献について、改めて再検討することを目的に、五人の関係者が参加する予定である。

なお平成二十七年年度には、「共存学」プロジェクトの研究成果を教育に還元するオムニバス講義「國學院の学問(共存学)」が、「地域(ローカル)と世界(グローバル)を学ぶ」共存学の問い」をテーマとして開講される。

(文責・宮本誉士)

## 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 『古事記』の学際的・国際的研究』活動報告

本事業は、二十一世紀研究教育計画(第三次)で提起された、「日本文化の国際的理解に向けた研究(国際日本学)の推進」を具現化する研究事業であり、研究開発推進センターが研究基盤整備小委員会の指示を受け研究マネジメントを行っている。本事業は、神道・日本文化の根幹に関わる古典の代表である『古事記』について、皇典講究所の創立以来、國學院で展開してきた研究成果をふまえ、さらに学際的・国際的な視点から理解しようとするものである。展望としては、十年単位で構想されるものであるが、まず平成二十五年十月より一年半の期間で事業を遂行してきた。取り組みを本格化させた本年度は、『古事記』の新たな注釈を作成するため、定例研究会や講演会などの活動を行い、研究の充実を図ってきた。

### 定例研究会

本事業では、グループIによる『古事記』本文校訂・訓読・現代語訳に即して、グループII各班による『古事記』の解釈史・研究史の研究が進められる。定例研究会を開催することで、それぞれの研究班が発表を積み重ね、『古事記』を中心とする研究の成果をまとめ、それを『古事記』注釈に反映させることを目指してきた。本年度は五月二十八日(水)・六

月二十五日(水)・七月二十三日

(水)・十月二十二日(水)・十一月十九日(水)に計五回の研究会を開催した。研究会は、グループIによる『古事記』本文の注釈とグループIIによる研究発表で構成され、グループIの注釈は、昨年度からの継続で、本年度は『古事記』上巻の「二神(イザナキ・イザナミ)の結婚」から「火神カグツチ殺される」までを行った。事業計画では「黄泉の国」まで行う予定であったが、研究会における議論の充実により、「黄泉の国」は次年度に繰り越されることとなった。また、もう一つの柱であるグループIIの研究発表は、神話学や考古学の知見から『古事記』の考察が行われ、まさに多角的に『古事記』を捉えた学際的研究が行われた。これら研究会において取り上げられた問題点や多くの研究情報は、その都度、共有化が図られた。

### 講演会

また本年度は、『古事記』の学際的・国際的研究』をテーマとして、文学部との共催のもとに講演会を開催した。概要については以下の通りである。

【日時】 十月二十五日(土)

十三時～十六時四十分

【場所】 学術メディアセンター

常磐松ホール

### 【講演】 鈴木正崇氏(慶應義塾大学教授)

授)「創世神話と王権神話—アジアの視点から—」

毛利正守氏(皇學館大学教授)

授・大阪市立大学名誉教授・

古事記学会代表理事)「古事記・日本書紀にみる文章と

文体、及び天照大御神と鏡」

鈴木氏の講演は、『古事記』をアジア視点から総合的に考察するものであり、『古事記』が他国の神話や習俗とも共通する内容を持つことを再認識させられた。続く毛利氏は、中国の少数民族の言語と古代日本人の言語について述べられたのち、天照大御神と鏡について「記・紀」と比較を通して論じた。詳細な資料比較により、『古事記』内部にある表現の問題について改めて考えさせられる講演であった。このように、学外の研究者による講演会を開催することによって、『古事記』に内在する多様な見解が明示され、今後の本事業にとって大きな視座を得る機会となった。当日は一六〇名を超える方々の聴講があり、一般の方々を含め『古事記』に対する関心の高まりを感じさせられた。

### その他の活動

本年度は国内外の調査活動も行った。八月にはスロヴェニアのリュブリャナ大学で開催されたヨーロッパ日本学会に平藤喜久子(本機構准教授)が参加し、海外における『古事記』研究の現状調査および研究交流を行った。平藤は十二月には、奈良県立美術館で開催された特別展「大

古事記展』の視察も行い、他機関における『古事記』研究の状況把握を行った。また一方では『古事記』の文献調査の一環として、本学が所蔵する『古事記』諸本のマイクロフィルムをデジタル化し、研究の利便性を図った。これは、本学における『古事記』研究の一部を継承するものであり、学内既存の研究の有効活用にもつながるものである。この他、文献調査としては、渡邊卓(本機構助教)が『古事記』関連文献の所蔵機関に赴き、さらなる諸本調査を進めている。

以上、平成二十五年十月以降の活動成果は、二十六年度末に成果論集として刊行予定である。

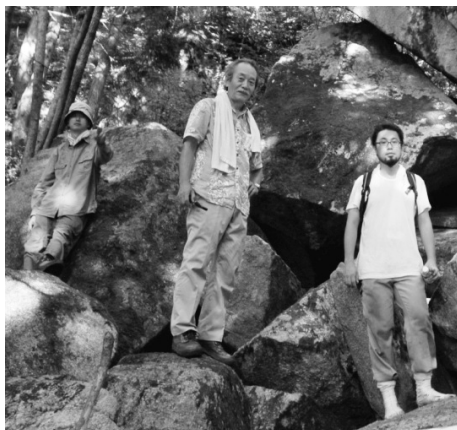
(文責・渡邊卓)



## 追悼

## 吉田恵二先生のご逝去を悼む

内川 隆 志



通夜、告別式を先生のご自宅に近い、多摩市吉祥院で執り行い、六百名を越える多数の参列者と共に御霊をお送りしたのである。

さらに、去る平成二十七年一月二十五日には「故吉田恵二先生を送る会」を若木タワー有栖川宮記念ホールにおいて、先生を偲んで二百人を越える参加者によって慰霊することが適った事を申し添える。筆頭にお別れの言葉を手向けた小林達雄本学名誉教授の他、岡内三眞早稲田大学名誉教授、春成秀爾国立歴史民俗博物館名誉教授、朱岩石中国社会科学学院研究生院考古系教授など学内外の諸先生の哀惜の辞によって厳かに執り行われた。

これまで先生が歩まれた学究の道を限りある紙面の中で紹介することとする。

吉田恵二先生は、昭和二十二年兵庫県神戸市西区のお生まれであり、幼少時には、ご尊父の影響で外国航路の仕事を見学したようである。昭和四十年京都大学文学部に入学され、考古学を専攻。昭和四十六年、同大学を卒業と同時に、奈良国立文化財研究所に文部技官として任官され、平城京の調査と研究の日々を過ごされた。昭和五十五年には國學院大學文学部史学科専任講師として本学に着任され、日本考古学とりわけ古墳

時代から歴史時代に関する授業を中心に担当された。昭和五十八年には助教、平成元年に教授となられ、今日まで國學院大學文学部史学科考古学専攻の要として活躍されたのである。公職としては、考古学研究会全国委員、多摩市文化財保護審議会委員、日野市文化財保護審議会委員、特定非営利活動法人文化財保護活用機構理事、中国社会科学院考古研究所海外研究員などを歴任された。

学部における考古学実習では昭和五十六年から平成十九年の二十七年に亘って伊豆諸島三宅島をフィールドとした発掘調査、平成二十一年からは長野県穂高古墳群の調査を継続されてきた。発掘調査を通じ、遺跡に対する緻密な研究姿勢を学生達に示すと共に、住民との密なる交流を通じて牙城に籠もりがちな研究を一般に解放し、その理解者を増やすことも怠らなかつた。

一方、ご自身の研究では、平成元年と平成十二年に北京大学に留学され中国考古学研究を深め、斯学においても日中の架け橋として国内外に多くの後進を育てられた功績も多大である。

私個人としては、國學院大學入学時のクラス担任として、先生自身の研究について篤く語られていた姿と歴史考古学を講じる旧校舎での授業風景が昨日のことのように思い出される。その後、先生から賜った数多くの温情を糧としていなければ、今日まで生きながらえていなかったものと我が身を振り返ることが出来る。

特に先生との関係が深まったの

は、平成十九年、國學院大學研究開発推進機構が発足し、改称された國學院大學学術資料館館長となられ、組織の一員となって以降である。あわせて平成十九年度文部科学省オーブン・リサーチセンター整備事業に選定され、平成二十三年に至る五年間、考古学グループのリーダーとして我々をお導き頂いた事も感慨深いものがある。この間、フィールドワークとして、国内外にご一緒させて頂いた思い出に残る場面やシンポジウム、フォーラムなど様々な関連事業を切り盛りされていたお姿が思い出される。この事業が終結し、平成二十五年からは、國學院大學博物館館長、國學院大學学術資料センター長として新たな舵取りの要職にあたられたのである。平成二十六年には、文化庁の補助金「地域と協働した美術館・博物館創造活動支援事業」を獲得し、山種美術館、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、東洋文庫と連携し「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」を展開し、様々な局面で先生のお力を頼ることが多く、その事業も最終局面を迎える中での急逝であった。

先生が座右の銘としておられた荀子の「出藍の誉れ」は、青を生む藍に徹した先生の生き様そのものであり、そして、今、天上から見下ろせば、藍から生じた多くの鮮やかな青が斯界を染めていることを誇らしく思っておられるに違いない。

安らかにお休み下さい。合掌

國學院大學文学部教授、國學院大學博物館館長、学術資料センター長である吉田恵二先生が、去る平成二十六年十二月十四日の夜、交通事故という不慮の災禍で急逝された。

当日は、先生がご担当されている考古学実習で調査報告書の読み合わせを行い幾人かの学生達と共にその労を労った後、無念にもこの災いに遭遇されたのであった。私は、同深夜に緊急連絡を受け、日本医科大学永山病院に駆けつけたものの、そこには、もはや泉下の客となられた先生の姿があった。程なく到着した深澤太郎助教と共に筆舌に尽くしがた無念の夜を過ごしたのであった。同年十二月十八日、十九日、ご遺族や私たち関係者の深い悲しみの中、

# 彙報

## 会議

### ○全体

・平成二十六年第二回人事委員会、平成二十六年五月二十九日(木)(持ち回り稟議)

・平成二十六年第二回運営委員会、平成二十六年六月十二日(木)(持ち回り稟議)

・平成二十六年第二回企画委員会、平成二十六年七月九日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第三回企画委員会、平成二十六年九月十日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第三回人事委員会、平成二十六年九月二十四日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第二回教員等資格審査委員会、平成二十六年九月二十四日(水) 十一時四十分～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第三回運営委員会、平成二十六年十月九日(木) 十六時五分～十六時三十分、若木タワー四階会議室○五

・平成二十六年第四回企画委員会、

平成二十六年十一月十二日(水) 十一時～十一時四十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第四回人事委員会、平成二十六年十二月四日(木) 十二時～十二時四十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第五回人事委員会、平成二十七年一月十三日(火) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第三回教員等資格審査委員会、平成二十七年一月十四日(水) 十二時～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第四回運営委員会、平成二十七年一月十五日(木) 十五時～十五時五十分、若木タワー四階会議室○五

・平成二十六年第五回企画委員会、平成二十七年一月二十一日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第六回人事委員会、平成二十七年一月三十日(金) 十四時～十四時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第四回教員等資格審査委員会、平成二十七年二月十日(火) 十六時～十六時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第七回人事委員会、平成二十七年二月十日(火)(持ち回り稟議)

・平成二十六年第五回運営委員会、平成二十七年二月十八日(水) 十八時～十九時十分、若木タワー四階会議室○五

### ○日本文化研究所

・平成二十六年第二回所員会議、平成二十六年七月二日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第三回所員会議、平成二十六年九月十六日(火) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十六年第四回所員会議、平成二十六年十一月五日(水) 十一時～十二時二十四分、A M C棟五階会議室○六

○学術資料センター  
・平成二十六年第二回学術資料センター会議、平成二十六年八月二十九日(金) 十三時～十三時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター  
・平成二十六年第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十六年八月五日(水)(持ち回り稟議)

・平成二十六年第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十六年十二月十八日(木)(持ち回り稟議)

○研究開発推進センター  
・平成二十六年第二回研究開発推進センター会議、平成二十六年八月二十六日(火) 十四時～十四時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

### 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

#### ○全体

・第四十回「日本文化を知る講座」見直される伝統宗教」、共催：渋谷区

教育委員会、各回、十三時三十分～十五時、A M C棟一階常磐松ホール  
◇第一回 六月七日(土)「神社の年中行事と地域社会」、講師：鈴木聡子(國學院大學助教)

◇第二回 六月十四日(土)「仏教教団の新たな取り組みと「仏教ブーム」、講師：徳野崇行(駒澤大学非常勤講師)

◇第三回 六月二十一日(土)「心のケアと伝統宗教の力」、講師：高橋原(東北大学実践宗教学寄附講座准教授)

◇第四回 六月二十八日(土)「国際交流と神道」、講師：岩橋克二(神社本庁国際交流課長)

・公開学術講演会「幕末政局と徳川慶喜―禁裏守衛総督・征夷大将軍期を中心に―」、平成二十六年十月四日(土)、十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、講師：大庭邦彦(聖徳大学教授)

○日本文化研究所  
・国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化―デジタル時代のチャレンジ―」、平成二十六年九月二十七日(土) 十三時～十七時四十分、A M C棟一階常磐松ホール、パネリスト：高橋徹(株式会社 AHC Creative)、上西亘(國學院大學)、Alan Cummings(英国、ロンドン大学)、Samuel C. Morse(米国、アーマスト大学)、コメンテーター：牧野元紀(公益財団法人東洋文庫)、司会：井上順孝(國學院大學、共催：科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」)

○校史・学術資産研究センター  
・平成二十六年教育開発シンポジ

ウム「教養教育における「建学の精神」の可能性―私立大学ならではの教育の実践―」(共催)、平成二十七年二月二十一日(土) 十三時〜十七時、AMC一階常磐松ホール、基調講演 松坂浩史(文部科学省大臣官房 文部科学広報官、報告者・パネリスト) 田淵結(関西学院大学教授、関西学院宗教総主事)、小嶋知善氏(大正大学表現学部長、教育開発推進センター長)、加藤季夫(國學院大學副学長、教育開発推進機構長)、コメンテーター 寺崎昌男氏(立教学院本部調査役、東京大学名誉教授)、司会 柴崎和夫(國學院大學教務部長、人間開発学部教授)、主催 國學院大學教育開発推進機構

○研究開発推進センター

- ・ 神道文化会公開講演会、「神社建築と神道文化」(共催)、平成二十六年六月十四日(土) 十三時〜十五時四十分、一〇〇周年記念二号館二二〇二教室、講師 山田岳晴(青山学院女子短期大学兼任講師)、講師 松島義知(日本建築工芸設計事務所所長)
- ・ 明治聖徳記念学会主催公開シンポジウム、「大正・昭和前期の神道と社会」(共催)、平成二十六年七月十九日(土) 十四時〜十八時、AMC棟一階常磐松ホール、講師 島蘭進(上智大学グリーンフケア研究所長)、発題 菅浩二(國學院大學准教授)、発題 2 野田伸幸(神戸大学准教授)、コメント 新田均(皇學館大学教授、司会) 阪本是丸(國學院大學教授)
- ・ 平成二十六年度第一回「共存学」公開研究会、「震災復興と巨大防潮堤、風土・歴史・文化をふまえた地域づく



りの展望 東北風景ノート「気仙沼市津谷・小泉地区災害復旧代替案」を参考に、「平成二十六年八月九日(土) 十三時三十分〜十六時三十分、AMC棟五階会議室〇六、発表者 廣瀬俊介(ランドスケイプデザイナー)、対話者 茂木栄(國學院大學教授)

・ 公開講演会「古事記」の学際的・国際的研究、平成二十六年十月二十五日(土) 十三時〜十六時四十分、AMC棟一階常磐松ホール、講師 鈴木正崇(慶應義塾大学教授)、毛利正守(皇學館大学教授)

・ 平成二十六年度第一回「渋谷学」研究会、テーマ「講中のにぎわい―もう一つの都市コミュニティ―」、平成二十六年十二月十三日(土) 十四時〜十七時、講師 松井圭太(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)、鈴木志乃(足立区立郷土博物館専門員)、高橋奈津子(國學院大學院生)、コメンテーター 渡邊欣雄(國學院大學教授)、八木橋伸浩(玉川大学教授)、コーディネーター 飯倉義之(國學院大學助教)

出張

○日本文化研究所

- ・ 平藤喜久子、「神話の伝説化に関する現地調査および社寺調査」のため、平成二十六年十月十七日(金)、福島県二本松市
- ・ 平藤喜久子、「神社建築の調査」の調査のため、平成二十六年十一月九日(日)〜十一月十日(月)、大阪市



八幡市

- ・ 平藤喜久子、「北陸の社寺調査」の調査のため、平成二十六年十二月十三日(土)〜十二月十五日(月)、福井県・石川県
- 学術資料センター
- ・ 朝倉一貴・大日方一郎・尾上周平、「須坂市受託事業」米子瀑布信仰悉皆調査業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十六年七月一日(火)〜七月五日(土)、長野県須坂市
- ・ 吉田恵二・内川隆志・大東敬明・加藤里美、「西南学院大学博物館との研究協定」のため、平成二十六年七月十四日(月)〜七月十五日(火)、福岡市
- ・ 大東敬明・吉永博彰、「神道関係資料複製調査」のため、平成二十六年八月八日(金)、京都府京都市
- ・ 吉田恵二・内川隆志・黒崎浩行・深澤太郎・石井匠、平本謙一郎、尾上周平、鈴木志穂、「金華山の現地調査」のため、平成二十六年十月三日(金)〜十月五日(日)、宮城県石巻市、女川町
- ・ 大東敬明、「神道関係資料複製」のため、平成二十六年十一月十三日(木)〜十一月十四日(金)、京都府京都市
- ・ 内川隆志、「全国博物館大会第六十二回大会」のため、平成二十六年十一月十九日(水)〜十一月二十一日(金)、三重県津市
- 研究開発推進センター
- ・ 黒崎浩行・網谷哲成、「東日本震災被災地の復興と支援活動に関する現地調査」のため、平成二十六年八月二日(土)〜八月五日(火)、岩手県上閉伊那大槌町
- ・ 古沢広祐・ノルマン ハイウンズ、菅浩二、「第二回アジア未来会議」多



様性と調和」への参加」のため、平成二十六年八月二十一日(木)〜八月二十六日(火)、インドネシアバリ島

- ・ 平藤喜久子、「ヨーロッパ日本学会での『古事記』研究」調査のため、平成二十六年八月二十五日(月)〜九月二日(火)、スロヴェニア リュブリヤナ大学
- ・ 茂木栄・宮本誉士・高久舞・杉内寛幸・網谷哲成、「東日本震災被災地の復興に関する現地調査」のため、平成二十六年十一月二十九日(土)〜十二月一日(月)、岩手県上閉伊那大槌町
- ・ 渡邊卓、「古事記」関連資料調査のため、平成二十六年十二月二十二日(月)〜十二月二十四日(水)、京都府京都市

刊行物

- 日本文化研究所
- ・ 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第七号(平成二十六年九月三十日発行)
- 研究開発推進センター
- ・ 國學院大學研究開発推進センター 渋谷学研究会編 渋谷間きがたり 2 『しぶちか』を語る』(平成二十六年十一月十五日発行)
- ・ 北海道神宮・國學院大學研究開発推進センター編『北海道神宮研究論叢』(平成二十六年十月五日発行)
- 國學院大學博物館
- ・ 國學院大學博物館編 特別展「富士山―その景観と信仰・芸術―」(平成二十六年九月一日発行)

# 資料紹介 有栖川宮熾仁親王 書幅

本資料は平成二十五年度に校史・

学術資産研究センターが新たに収蔵した有栖川流の書幅である。有栖川流とは、靈元天皇の書風を受け継ぎ、江戸時代後期に、有栖川宮家第五代の熾仁親王によって創始され、第八代の熾仁親王によって大成された書風である。言わずもがな、熾仁親王は皇典講究所初代総裁であり、本学と有栖川宮家との関係から所蔵する

運びとなった。

この書幅は、本紙三〇・八×四四・六糎、総丈一一三・三×五六・六糎であり、掛軸の天地と中廻しには金襴の表装裂が用いられ、本紙の上下にある一文字と風帯には皇室専用の家紋である菊紋と桐紋があしらわれている。また、左右の軸先には菊紋と陰菊紋が蒔絵で施されているなど、全体として見事な装丁となっている。

本紙の和歌懐紙には次のようにある。

和氣清麿神号

宣下あらせ給ひしを

こたひ祝の哥人々

よみけるついでに

よめる

中書王

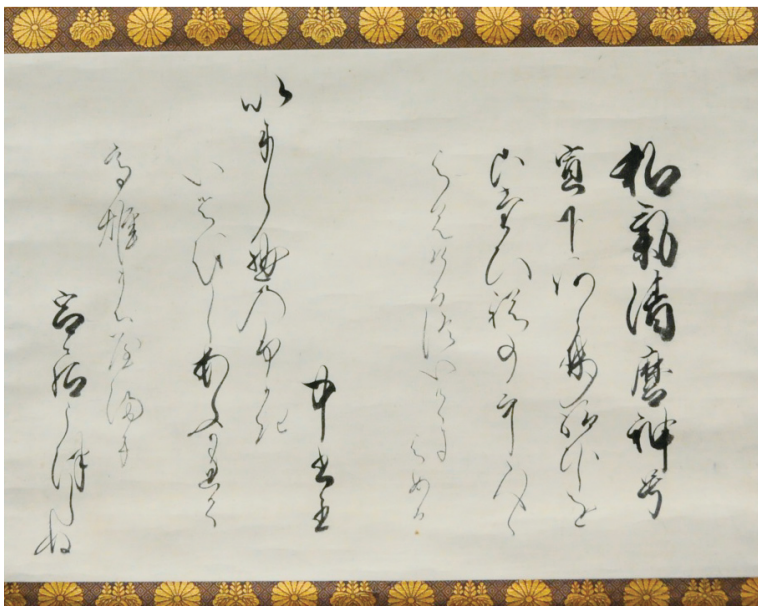
いにしへのふかきさ

いさをしあふかれて

高雄のやまに

宮居うつしぬ

ここに「中書王」とは、中務省の長官である中務卿を意味し、中務省は天皇に近侍して詔勅の宣下や位記の発行といった宮中の政務を担い、中務卿には親王が任



命された。そのため、本書は有栖川宮家で中務卿となった、第五代熾仁親王、第六代熾仁親王、第七代詔仁親王、第八代熾仁親王のいずれかの手によるものであり、書幅を収める箱書きには「熾仁親王」、書幅外題には直書で「有栖川宮熾仁親王御筆懐紙」とあることから、熾仁親王の手として伝来してきたようである。しかし、和歌の題詞をみると、古代の政治家である和氣清麻呂に神号が宣下されたときの歌であることが窺われる。神号の宣下は嘉永四年（一八五二）三月十五日のことであるため、弘化四年（一八四七）から八月から中務卿であった熾仁親王が該当する。『熾仁親王行実』を繙くと、嘉永四年に「三月十五日、贈正一位和氣清麿に讓王大明神號を賜ひ、重ねて正一位を贈らるゝに因り、親王位記に加署せらる。」と本書幅と合致する記録が残っており、この時に熾



仁親王が祝いの席で詠んだ歌を揮毫したものともて間違いなかるう。神号の宣下は、和氣清麻呂の功績を高く評価した孝明天皇によるものであり、当時、高尾山の神護寺境内に祀られていた和氣清麻呂霊社に宣命を下し「正一位護王大明神」の神階神号を授けたのであった。おそらく熾仁親王は、中務卿として天皇に近侍し詔勅の宣下と位記の発行に携わったのであろう。ちなみに熾仁親王は、律令官の廃止に伴って中務卿の位を明治二年（一八六九）七月に返上している。

熾仁親王は明治天皇の書道・歌道の御師範を務められたことは知られるが、本書幅はそうした歌と書の事績を伝えるだけではなく、皇典講究所総裁就任以前に中務卿として天皇に近侍していた時代の資料としても注目されるものである。

(渡邊卓)